

中澤忠之氏の博士学位論文『安吾戦争後史論 モダニズム以降の表現の可能性』は、太平洋戦争後の坂口安吾の歴史に題材を求めた作品を主な分析対象としながら、竹内好、小杯秀雄、花田清輝らの批評活動とかかわらせながら、文学史と美術史を軸にしながらい、1955年まで戦後史を記述しようとしたものである。

中澤氏の論文の独自性は、まず安吾の歴史観の特徴を「カラクリ」、  
「シニプル」、  
「必要」という三つの原則の中に見いだしたところにある。「カラクリ」と「シニプル」という二つの原則は、既成の価値観や制度に反抗しようとしていたモダニズムにおける、リアリズム批判から練り上げられた方法であることと明らかにしたうえで、表現しようとすることと、表現手段の切断についての安吾の思索の過程をあとづけている。また「必要」という概念が、安吾のモダニズム以降の表現の可能性を問う原則の一つであることを明らかにし、「必要」とされたものにこそ美が宿るとした安吾の具体的な作品の中に機能しているあり方を分析している。竹内好とのかかわりの中では、「政治と文学」論争などの戦後の文学論争における、安吾の独自の批評的視点が明らかにされている。また、小杯秀雄と花田清輝との美術をめぐる議論をとおして、小杯の主張した古典美、花田の主張した前衛美に対する、安吾の必要美の重要性をとらえ直そうとした。

論文審査の中では、文法や論理構成が、学術論文よりは批評としての傾向を強く持っていること、中心となる分析概念に十分な論理的な整合性が欠けていること、論旨の展開が冗長に流れていることなどが批判された。

しかし、坂口安吾の戦中と戦後を連続的にとらえようとする歴史認識の独自性を明らかにしたことをはじめとして、これらでの安吾研究を転換するいくつかの成果があることを認め、中澤忠之氏の論文が博士(学術)の学位にふさわしいと判断し審査委員全員により合格と判定した。